不規則抗体検査編
当直帯における不規則抗体検査の進め方

◎松 浦　　裕[1)]
宮崎県立日南病院[1)]

近年、輸血検査は自動化され多くの施設で全自動輸血検査装置が導入されおり、日頃から輸血検査を行っていない技師でも一定の検査結果を得ることができる。しかし、当直帯の輸血検査は１人体制の施設がほとんどであるため、検査中に予期せぬ反応が出た場合には大きな負担となる。安全な輸血療法を行う上で、臨床的意義のある抗体を検出するため不規則抗体検査は必須であり、更に不規則抗体スクリーニングで陽性となった場合には臨床的意義のある抗体の存在を確認するため精査を行う必要がある。当直帯であっても迅速に安全な血液製剤の選択を行い、適切な対応ができる知識と技術の習得が重要である。臨床的意義のある抗体が存在する場合には輸血による溶血性輸血副反応、更に妊婦では胎児・新生児溶血性疾患を誘発する可能性があるため、不規則抗体スクリーニングで陽性反応を示した方法で精査を実施する必要がある。不規則抗体同定検査では反応パターンや凝集の強さ、自己対照などすべてを考慮しながら消去法を行い、抗体を同定していく。陽性パターンから可能性の高い抗体を推定し、消去法により否定できない抗体を推定する。臨床的意義のある抗体が検出された場合には、対応抗原陰性血を選択する必要がある。現在は血液センターの協力もあり、対応抗原陰性製剤も比較的速やかに供給されるが、準備にかかる時間や理由を的確に臨床側へ報告し、理解を得ることも重要となる。また、患者情報が検査への手掛かりとなることもあるため、患者情報の収集や輸血歴等を確認することも重要である。普段、他部門で業務を行っている技師にも検査の進め方やポイントを周知し、より迅速に安全な輸血療法の遂行に繋げていきたい。